

学位論文審査の要旨

学位申請者	谷内 美智子【論文博士】 【国際日本学専攻 平成13年度生】 (平成20年3月31日 単位修得退学)	要 旨
論文題目	日本語学習者の統語的複合動詞の意味推測における文脈量、日本語習熟度、後項動詞の種類の影響	<p>本研究ではモンゴル語を母語とする学習者を対象に、意味推測時の文脈量、日本語習熟度、後項動詞の種類が統語的複合動詞の意味推測にどのような影響を与えるか、を検討した。研究1・3では多枝選択式、記述式での意味推測の正確さを検討した。研究2・4では多枝選択式、記述式での意味推測の特徴を検討した。</p> <p>その結果、以下の点が明らかになった。第一に複合動詞の正確な意味推測には、後項動詞が既習語かどうか、字義通りの意味を保持しているかどうかによって変化することである。第二に文脈からの情報は語の意味推測には不可欠で、最低でも単文以上の文脈が必要であることである。第三に意味推測の正確さは日本語習熟度によって高まるが、推測される意味の傾向は日本語習熟度の高低では大きく変わらないことである。第四に統語的複合動詞の意味推測では学習者は「前項動詞の意味+後項動詞の意味」などのストラテジーを用いて意味を推測している可能性があることから、学習者に前項動詞と後項動詞の両方を意識すること、そして単独動詞と複合動詞の意味の違いを明確に示すことが有効であるということである。</p> <p>以上は我々の直感に合致するものだが、それらについて実証的に解明した点が本研究の最大の意義であり、複合動詞の習得研究、語の意味推測研究において有用な知見を提供できたと考えられる。</p> <p>審査は二度行われた。初回の審査では、本研究が採用した理論枠組、方法などに関する根拠・理由が曖昧であるなどの指摘がなされ、申請者はそれに従い修正を加えた。また公開発表会でも、本研究の成果がわかりやすく説明され、質問に対しても誠実に回答していた。その結果、最終審査では本論文が博士論文としての基準に達していると評価され、博士（人文科学）(Ph.D. in Applied Linguistics) を与えることを全会一致で決定した。</p>
審査委員	(主査) 教授 森山 新 教授 佐々木 泰子 准教授 西川 朋美 准教授 伊藤 さとみ 講師 菅生 早千江	
インターネット公表	○ 学位論文の全文公表の可否 (可 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 否) ○ 「否」の場合の理由: ア. 当該論文に立体形状による表現を含む イ. 著作権や個人情報に係る制約がある ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている エ. <input checked="" type="checkbox"/> 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている ※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について	

